

阿部彩『子供の貧困―日本の不幸を考える』岩波新書 2008 年

第6章 子どもにとっての「必需品」を考える

用語解説

1 すべての子どもに与えられるべきもの p180

○相対的剥奪 p180

イギリスの貧困研究学者ピーター・タウンゼンドは、人間の最低限の生活には、生物的に生存するだけではなく、社会の一構成員として人と交流したり、人生を楽しんだりすることも含まれると論じ、それができない状態をこのように名付けた。

○合意基準アプローチ p183

相対的貧困を測るための「最低限必要なもの」を研究者ではなく、社会全体に選んでもらう手法。あらかじめ多めに選んだ項目リストについて、それが最低限の生活に必要なかどうかを問い、回答者の 50%以上が「絶対に必要である」と答えた項目だけを社会的に認知された必需品(社会的必需品)とする。

○総中流神話 p191

1970 年代の日本における、日本国民の大多数が自分を中流階級だと考える「意識」を指す「一億総中流」のこと。内閣府が実施する「国民生活に関する世論調査」の結果を見ると、今なお国民意識としての「一億総中流」は続いていると考えられる。

2 子どもの剥奪状態 p192

「剥奪」 p192

英語で deprivation。「何かを奪われること」という意味があり、ただ単に欠如しているというだけでなく、欠如を強いられたというニュアンスが含まれる。

3 貧相な貧困観 p208

○政策提言 p 209

アドボガシーadvocacy とも。特定の問題について政治的に考えや意見を多くの人の前に出すこと。また、その考えや意見自体を指す。